医事・文談　九百六十八　平岸　三八

《正岡子規（36）の続き》その256
子規周辺の人びと（六）

余談だが、子規のベースボールの文中の打者・走者・死球・飛球などの訳語は今も用いられている。

「ベースボール未だ訳語あらず」として子規の創意のものとして次の如き語が、説明中に書かれている。括弧内は現今通用のもの。

投者（投手）、攫者（捕手）、本基（本塁）、第一基（一塁）、短遮（遊撃）、一基・二基・三基を経て本基に帰りたる者を廻了（生還）、除外（アウト）、場右（右翼）、場中（中堅）、外曲、内曲、墜落等々である。走者は敵の手の下をくぐり基の前二間許り前より身を倒して辷り込むことありと、既に「辷り込んでセーフ」という場面のあることが書かれている。

また河東碧梧桐は明治22年、高浜虚子には翌23年夏、いずれも帰省中の子規から野球の手ほどきをされていて、俳句より先に師弟というつながりになっている。

大原観山が、弟子の詩稿を朱筆で添削してあるのを見て、その美しさにうたれ〈早く年取りて詩を作る様になりたし〉と思った子規は、祖父の死後に師事した土屋久明の指導で、はじめての五言絶句を作った。

聞子規
一声孤月下　啼血不堪聞
半夜空欹枕　古郷万里雲

のちに喀血して子規と号するに至るのだが、はじめての作詩の題が「聞子規」であるのは一奇である。

これから専心、平仄のならべかたを習い、しきりに漢詩を作った。九歳の頃からである。師の久明は着実な人で、常に傍に「玉篇」を置いて、引いて教えた。

漢籍や漢詩は、久明と同じく藩の儒者であった碧梧桐の父の河東静漢にも習ったし、習字は、伯父（父常尚の兄）の佐伯政房に習った。政房は藩の祐筆であった。

ある日、手習に佐伯家に行ったが、あいにく政房が他出中であったので、子の政直が代りに習えてやろうと言ったところ、政房の帰りまで待つというので、「では帰りまで、そこを動くな」と命じた。やがて様子がおかしいと、問いただしたところ、坐したまま大便をもらしていたという逸事が伝えられている。なぜそんな粗相をしたのかと問い正したところ、「そこを立つな」といわれたからと答えたという。弱虫で「青瓢箪」とあだ名されていたのに、なかなか強情のところがあったらしい。

子規は、「父は高慢にして強情」と記しているから、父の素質を受けついでいるのかもしれない。

地許の小学校を経て、明治13年（一八八〇）14歳で県立松山中学に入学した。

この間、明治12年、疑似コレラに罹り、安倍義任医師の診を受けた。義任は、第一高等学校長、幣原内閣の文部大臣を歴任した安倍能成の父である。治療を受けたことに対する、礼の手紙が現存する。実際は、大腸カタルだったらしい。

貸本屋から本を借りて読むことをおぼえ、五冊一昼夜5厘で借り、馬琴、水滸伝、八犬伝、一休和尚の伝記などを読んだ。貸し賃は五冊一昼夜5厘、一日のうちなら何度とりかえ何冊になっても5厘であった。名文を写したり、写本を作ったりした。

一体、松山藩というのは、15万石の親藩であったが、特に傑出した藩主を出した訳でもなく、藩士に有名人がいた訳でもなかったようだ。しかし維新後、藩主久松家は伯爵を授けられたのだから、それなりの大藩であったのであろう。

幕末、隣国の土佐（高知藩）の坂本龍馬らが天下を動かさんとしたごとき、或は維新後、板垣退助らが土佐立志社を設立し、自由民権、国会開設運動を始めた如き、国を動かすような人物が出なかったが、いたずらに狭い小天地に跼蹐すべきでないという気風が生じたようである。

表紙写真

野草便り－アケボノソウ－

苫小牧市医師会　山本　一男

山地の湿った草地や水辺に生えるリンドウ科の1～2年草。開花の時期は苫小牧では今ごろである。花の白色を明けの空の色に例え、花びらの端にある細かい点々模様を夜明けの星に見立てて、この和名が付けられたといわれている。当市の近郊にある森田遊園で撮影した。